改作本『夜寝覚物語』の序について

小田成江

はじめに

平安時代後期に成立した『夜の寝覚』には、鎌倉時代に成立したとされる改作本のあることが知られている。現存する伝本には、金子武雄氏所蔵の五巻の完本と三条家旧蔵本があるが、後者は巻一から巻三までの有欠本である。さらに、巻一の初めの方を欠いているため、改作本の序を問題にする場合には金子氏所蔵の通称中村本によるしかない。

さて、この改作本の序は、原作の序と全く様相を異にしており、座談問答形式を採用して、原作の話を実夢の例証として提示しようとしている。つまり、原作が描こうとした「心づくしなる寝覚めの御仲らひ」に主眼点を置くのでなく、天人降下の夢を見たことで女主人公が幸を得るという話を語るための導入部として機能しているのである。

本稿は、そのような性格を有する改作本の序が、どのような作品の影響のもとに形成されていて、物語文学の上でどのような意義を有するのかを考察したものである。

一　座談問答仕立ての構成

序の構成が座談問答仕立てであることが、直接的には『無名草子』にならったものであろうと指摘したのは金子氏であった。[1] 東山のほとりの邸で文学談義をするという構想は、他の『大鏡』『宝物集』といった座談問答仕立ての作品と比較してみると、座談の行われた場所と座談の中味という点で、最も『無名草子』に近いと言えよう。[2]

しかし、従来『奥義抄』との関連が指摘されてきた序[3]の第一、第二話者の問答には『和歌色葉』の記述に近い表現が見られる

ため、この歌学書が座談問答仕立てであることからの影響も考えられるのではないだろうか。この点について以下論じていく。

まず、中村本の序の初めから第一、第二話者の問答までを次に引用する。(4) 但し、本文には適宜漢字を当て、仮名遣いも改め句読点等も変えた。また傍線や記号は私が施した。(以下、中村本の本文を引用する時はこれに同じ。)

紫藤の露の底の花の色衰へ、翠竹の煙のうちに鳥の声も稀になりゆけば、春の名残今は限りにやと眺めぬ人なき夕べ、好き好きしき人々、東山のほとりにをかしき住まひあるに集まりて、連歌・和歌の会などはなかなかなりとて、古き物語や草子の中に、おぼつかなきことどもを言ひ合はせつつ、互ひに霞みこもれる心の中を晴るけけるに、「i蜘蛛のふるまひに待つ人の来ること、ii人に恋ひらるる人の袖に墨のつくこと、iii衣を返して恋しき人を夢に見ることども、げにあることやらん」と言ひ出だしたるを、ある人言ふやう、「蜘蛛下がりて待つ人の来るとは、a本文に、喜びあり、とあめれば、待つ人の来たらんこそ喜びにてあるべければ、疑ふべきにもあらず。又、墨の袖につくこと、歌に古く詠みならはしたれども、bさせる本文などもなきにや。中にも、衣を返して恋しき人を夢に見るといふも、cなべてあまり歌に詠みふるしたることなれば、はじめて疑ふべきことにもあらず」と言ふを、

最初に、傍線部iからiiiの項目について見てみると、これらは『奥義抄』にも所収されているが、『和歌色葉』では、「八　難歌会釈者」という章に所収され、その歌の内容についての解釈がなされていて、中村本の序の「古き物語や草子の中に、おぼつかなきことどもを言ひ合はせつつ、互ひに霞みこもれる心の中を晴るけける」という座談のあり方と合致しているという点を指摘しておきたい。

次に、これら三項目に対応する『和歌色葉』の項目記事を引用し、『奥義抄』の記事との相違を述べてみることにする。(5) (傍線や記号は私が施した。＊は『奥義抄』の同じ項目中での記事である。)

Ⅰ『和歌色葉』「八　難歌会釈者　古今六十七首」の中の「六十七　そどほりひめ」

六十七　わがせこがくべきよひなりささがにのくものふるまひかねてしるしも

これは衣通姫の歌也。(中略) 衣通姫帝を恋ひ奉りて、ひとり居て帝のみまするこをしらずしてよめる歌也。

わがせことは男也。Aささがにかかりて悦びきたるといふ心也。天皇この歌を聞きたまひて御感情有りて、詠じ給へる歌云（後略）

＊『奥義抄』下釈「古今歌百十六首」の後の「人名　十二衣通姫」

十二衣通姫　序云。

日本紀云、（中略）衣通姫みかどを恋ひたてまつりてひとりゐたり。みかどのみまするこをしらずしてよむ歌

わがせこがくべきよひなりささがにのくものふるまひかねてしるしも

住吉の社は四社おはします。南社は此衣通姫也。玉津島明神と申す也とぞ津守国基は将作に語り申しける。

Ⅱ『和歌色葉』「八　難歌会釈者　万葉古歌百十三首」の中の「百三　そでのすみ」

百三　わぎもこがひたひの髪やしじくらむあやしく袖にすみのつくかな

恋する人は、ひたひのかみのそそけ、B人に恋らるる人は袖にすみつく也。しじくとはそそくる也。あやなくとはあぢきなく、よしなき也。

＊『奥義抄』中釈「古歌四十八首」の中の「四十八　ゐもりのしるし付そでのすみ、こまつまづく、ころもかへす」

人にこひらるる人はそでにすみつく、又こひすればひたひの髪しじくともよめり。古歌云、

わぎもこがひたひのかみやしじくらむあやしくそでにすみのつくかな

Ⅲ『和歌色葉』「八　難歌会釈者　万葉古歌百十三首」の中の「百六　衣かへす」

百六　しろたへの袖をりかへしこふればかいもがすがたの夢にしみゆる

衣をかへしてぬれば恋しき人の夢にみゆといへり。されば古今にも、

いとせめて恋しき時はむばたまのよるの衣をかへしてぞきる

これは〔衣通姫の歌〕小野小町がこの歌を本にてよめる也。かやうの事どもさせるみえたる所なけれど

も、cふるくよりいひつたへたるにつきて人みなよめり。

＊『奥義抄』中釈「古歌四十八首」の中の「四十八　ゐもりのしるし付そでのすみ、こまつまづく、ころもかへす」

又きぬかへしてぬればこひしき人ゆめにみゆるともよめり。（歌の記述なし）

Ⅰの『和歌色葉』の傍線部A「ささがにかかりて悦びきたるといふ心也」という表現は、『奥義抄』にはなく『和歌色葉』の方にだけ見られる表現である。傍線部Aの中の「悦びきたる」という記述が、中村本の序の傍線部a「本文に、喜びあり、とあめれば」の中の「喜びあり」という表現に近く、どちらも蜘蛛の動きが「喜び」をもたらす前兆だという内容の何らかの「本文」に基づいて表現しているらしいと言える。(6)

次に、Ⅱの『和歌色葉』の傍線部B「人に恋らるる人は袖にすみつく也」という表現は、序の傍線部ii「人に恋ひらるる人の袖に墨のつくこと」という箇所に、わずかな助詞の違いだけで受け継がれているが、『奥義抄』にも見られる表現である。しかし、Ⅱの『和歌色葉』の百三の歌の解釈文は単に恋を暗示する現象を言い、語の説明をしているだけで、先ほどのⅠの『和歌色葉』のように何らかの「本文」に基づくような記述はしていない。中村本の序の方は、傍線部a「本文に、喜びあり、とあめれば」を受けて、次の項目でも、傍線部b「させる本文などもなきにや」という表現をしていると考えられ、その上傍線部bは『和歌色葉』のⅡで、何らかの「本文」に基づくような解釈文がないということと対応している。つまり、前述のⅠで述べたように、『和歌色葉』の歌の解釈文の内容と序の傍線部iの項目について第二話者が答えた内容とが対応していたように、今度もⅡの『和歌色葉』の歌の解釈文の内容と序の傍線部iiの項目について第二話者が答えた内容との対応関係が見られるのである。

さらに次のⅢの『和歌色葉』の傍線部C「ふるくよりいひつたへたるにつきて人みなよめり」という表現は、中村本の序の傍線部c「なべてあまり歌に詠みふるしたることなれば」の内容と一致している。その上、『和歌色葉』では、「衣かへす」という独立した一つの項目を立て、例歌を挙げて解釈しているが、『奥義抄』では、「衣かへす」については、「ゐもりのしるし」の項目の中で「付」として従属的に扱われており、例歌もなく、「又きぬかへしてぬればこひしき人ゆめにみゆるともよめり」という簡単な表現のみで終わっているのである。このことか

ら、「衣かへす」についての中村本の問答は、『奥義抄』よりも『和歌色葉』の記事を踏まえたような表現になっていると言える。

以上の考察から、中村本の序の第一、第二話者の問答の表現には、『和歌色葉』の記述表現との対応関係が見られ、中村本の序の構成には『和歌色葉』の影響があると言うことができよう。

となれば、序の座談問答仕立ての構成は、『無名草子』だけでなく、『和歌色葉』からも影響を受けていたと言えるのではないだろうか。

二　第三、第四話者の問答

ここまでの考察で、中村本の序には、『無名草子』と『和歌色葉』の影響がありそうだと言うことができるが、次に展開する座談問答の表現中にも、それらの作品からの影響と考えられる箇所がある。

序の第一、第二話者の問答の後を継いで、第三話者が話題を夢について絞っていくが、その夢についての見方を、第四話者が批判する場面である。その本文を次に引用する。

また人言ふやう、「ころもを返して夢に必ず見るべくは、なかなか由なかるべきことかな。ⁱむなしき夢に恋しき人を見て、うつつのかひもあるまじきに、思ひも添ひぬべし」と言ふを、中に大人しき人、よろづ知り顔にして、「ⁱⁱはかなき夢とはいかにものし給ふか。ⁱⁱⁱ夢こしちに通ず、と申すこと本文に見えたり。されば、ⁱᵛ雨の夜の寝覚がちにて閨のうち静かならぬには、そぞろなる夢も見る。これを、こひ、と申すなり。ᵛ空晴れ月明らかなる折、鮮やかなることを見るを、しちん、と申して、これは疾く遅きことこそあれ、必ずむなしからずとぞ、承り置きたる。

右の引用本文中の傍線部ⁱとⁱⁱは、『無名草子』の「夢」評の中の次の傍線部Ⅰ・Ⅱの表現が反映されていると考えられる。(7)

（傍線や記号は私が施した。）

何の筋と定めて、いみじと言ふべきにもあらず、Ⅰあだにはかなきことに言ひ慣らはしてあれど、Ⅱ夢こそあはれにいみじくおぼゆれ。遥かに跡絶えにし仲なれど、夢には関守も強からで、もと来し道もたち帰ること多かり。

『無名草子』の傍線部Ⅰ「あだにはかなきことに言ひ慣らはしてあれ」は、世間一般では夢をはかないものだと考えているということを指摘しており、その世間一般の考え方を逆接の「ど」で反転させ、傍線部Ⅱ「夢こそあはれにいみじくおぼゆ

れ」といって、夢を趣深いものとして高く評価している。このように、夢についての世間一般の価値観とそれを否定する価値観とを対置させるという『無名草子』の表現方法が、中村本の序の第三話者と第四話者の問答、傍線部ⅰⅱの箇所に用いられていると考えられる。

つまり、第三話者が傍線部ⅰ「むなしき夢に恋しき人を見て、うつつのかひもあるまじき」というように、夢はむなしいものだという自分の考えに基づいた意見を述べているが、この夢を「むなしき」と捉える考え方は彼一人のものではなく恐らく当時の世間の多数の考え方であろう。それは、『無名草子』が傍線部Ⅰ「あだにはかなきことに言ひ慣らはしてあれ」と世間一般の夢に対する評価を述べていたのと一致する内容である。次に、その考え方に対し第四話者が、傍線部ⅱ「はかなき夢とはいかにものし給ふか」と、夢ははかないものではないという立場から反論しているのだが、それは『無名草子』が、世間一般の考え方を否定し、傍線部Ⅱ「夢こそあはれにいみじくおぼゆれ」といって、夢に高い評価を与えている姿勢と通じるものである。このように、世間一般の考え方とそれを否定する考え方を対置しているという構成に、『無名草子』の「夢」評の中の表現方法と同種の構成を見出すことができ、この二人の問答に『無名草子』の傍線部ⅠⅡの表現の影響をみてよいのではないだろうか。

ところで、『無名草子』には『狭衣物語』評の中に夢について次のような記述もある。

源氏の宮の御もと、賀茂大明神の、御懸想文つかはしたること。夢はさのみこそ、と言ふなるに、余りに顕証なり。

『狭衣物語』巻二、堀川大殿の夢の中で、源氏の宮が斎院となる前兆が示されたことに対して、余りに露骨すぎると非難している箇所だが、傍線部を見ると、夢と現実とは連動するものだということを一応認めている姿勢が伺える。そしてこの姿勢は、第四話者が、序の傍線部ⅴ以下「必ずむなしからずとぞ、承り置きたる」までで示している、夢と現実との連動を信じている姿勢と通じるものである。つまり、『無名草子』の夢と現実とが連動することを認めている姿勢は、序の第四話者の夢に対する姿勢と一致しており、中村本の夢に対する考え方は、『無名草子』の中に見られるものであると言える。

以上のことから、『無名草子』の夢についての記述は、序の第三、第四話者の夢についての問答を生み出し、第四話者に夢と現実との連動を強く主張させることに影響したと言えるのではないだろうか。

三　第四話者の会話内容―その一―

第三話者への反論の後、「よろづ知り顔」の第四話者は、夢について二つの種類があると言う。つまり、二で引用した中村本の本文中の傍線部ⅳの中にある「そぞろなる夢」とⅴの中にある「しちん」とであるが、この二箇所の傍線部は、適宜語を補ってみると次のように書き改めることができる。括弧の中が補った語である。

ⅳ雨の夜の寝覚がちにて閨のうち静かならぬ（折）には、そぞろなる夢も見る。これを、こひ、と申すなり。

ⅴ空晴れ月明らかなる折（には）、鮮やかなることを見る（。これ）を、しちん、と申して

ここで、ⅴの傍線部「ことを」をⅳの傍線部と同じように「夢も」に変えれば、両者の文構造は全く同じものとなるのである。つまり、どちらも、どのような条件下でどのような夢を見るのかを説明し、それぞれの夢を「こひ」、「しちん」と言うのだと解説しているとみることができる。

このうち、ⅴの方の解釈は従来より指摘されている通りである。即ち、『寝覚』の物語開巻部、八月十五夜の澄み切った満月のもとで女主人公が見た天人降下の夢を導き出す表現であり、「しちん」とは、中村本の頭注書入れによって「実夢」のことだというものである。「実夢」という語は『宝物集』や『古今著聞集』に見られ、[8]夢と現実とがしっかり連動している夢である。中村本は、この天人降下の夢によって、女主人公が現実に琵琶の秘曲を弾けるようになり、やがて幸をつかむことになったと物語るのである。

一方、ⅳの方の解釈は未だ定説をみない。これまで指摘がなかったが、「雨の夜の寝覚がちにて閨のうち静かならぬ」という表現は、白居易の「上陽白髪人」の詩句の影響があると思われる。[9]『和漢朗詠集』上「秋　秋夜」にも所収の次の詩句の傍線部である。[10]

秋の夜長し　①夜長くして眠ることなければ天も明けず
耿々たる残んの燈の壁に背けたる影　②蕭々たる暗き雨の窓を打つ声

秋夜長　夜長無眠天不明　耿々残燈背壁影　蕭々暗雨打窓声

傍線部①が序の「夜の寝覚がち」という表現へ、傍線部②が「雨の夜」「閨のうち静かならぬ」という表現へ移し変えられたと考えることができる。

『和漢朗詠集』といえば、序の起筆部がその中の詩句を踏ま

えたものであることが、中村本の頭注書入れで指摘されている。今更新たに述べるまでもないことだが、序の起筆部の「紫藤の露の底の花の色衰へ、翠竹の煙のうちに鳥の声も稀になりゆけば」という表現は、『和漢朗詠集』の「紫藤の露の底の残花の色　翠竹の煙の中の暮鳥の声」（巻上「春　藤」源相規）という詩句表現をほとんどそのまま採ったものである。

ところが、今問題にしている傍線部ⅳの箇所では「上陽人」の詩句表現をそのまま採りこんだのではなく、その詩句内容を翻案した表現になっていて、起筆部のように『和漢朗詠集』の中の詩句を踏んだものと言い切ることはできない。そこに、他の作品からの影響を指摘することのできる余地が生じるのだが、その候補として、前述の『和歌色葉』を挙げておきたい。

『和歌色葉』に次のような項目がある。

『和歌色葉』「八　難歌会釈者　後拾遺三十六首」の中の「二十　上陽人」

二十　恋しくは夢にも人を見るべきに窓うつ雨に目をさましつつ

文集に、蕭々暗雨打窓声といふ事を題にてよめるなり。

これは上陽人の事也。

ここに挙げられている和歌は、『後拾遺和歌集』や『大弐高遠集』にも所収されている藤原高遠の歌である。序の傍線部ⅳの「寝覚がち」という表現は、白居易の詩句の「眠ることなければ」よりも、高遠の歌の「目をさましつつ」という内容と一致している。また、「夢」という語が白居易の詩句には見られないが、高遠の歌には見られるといったことから、序のⅳの「雨の夜の寝覚がちにて閨のうち静かならぬ」という表現は、直接的には高遠の歌からの影響と言ってよいのではないだろうか。そして、前述したように、『和歌色葉』の、中村本の序への影響は濃厚であると考えられることから、高遠のこの歌が納められている歌集よりもやはり『和歌色葉』からの影響を考えるのが適当かと思われる。

四　第四話者の会話内容―その二―

ところで、この傍線部ⅳの中の「こひ」という語について、従来「恋」や「寤寐」と解釈されてきたが、[11] 傍線部ⅲの中の「夢こしちに通ず」と関連させて、一つの解釈の可能性を示しておきたい。[12]

三で示したように、傍線部ⅳとⅴの文構造が同じと解釈するならば、「こひ」は「しちん」と並んで夢の種類を表す語という

ことになる。「しちん」は「実夢」のことであるということから推測すれば、「こひ」は「虚夢」という夢をいっているということになれば都合がよい。[13]

『観智院本類聚名義抄』によれば、「実」の和音（＝呉音の日本化した音）は「ジチ」、「虚」の和音は「コ」である。「夢」の音は「ン」であるから、「実夢」の音表記は「ジチン」、仮名表記は「しちん」となる。[14] ならば、「虚夢」は「こん」と仮名表記されるところだが、中村本では「こひ」と表記されている。この矛盾を解消する方法として、ここに誤写があったと想定することはできないだろうか。中村本には、誤写が非常に多いという指摘があるので、[15] この考え方にも一考の余地があるのではないだろうか。

その上、「こひ」を「虚夢（こん）」であると考えれば、傍線部ⅲの「夢こしちに通ず」の「こしち」が、「こ＝虚」「しち＝実」という解釈も成り立ち、[16] 傍線部ⅲからⅳ、ⅴへの文脈の流れが非常にスムーズになるのである。

つまり、「夢は虚にも実にも通じるものだ」という内容の「本文」があり（ⅲ）、それに基づいて「虚夢」（ⅳ）と「実夢」（ⅴ）を説明しているとみなすことができる。

「虚実」を「コジチ」とよんだかどうかの確証はないが、新日本古典文学大系（岩波書店）の『今昔物語集』では、「虚実」のよみに「こじち」又は「こじつ」を当てていることは参考になるだろう。[17]

傍線部ⅲで挙げている「本文」が見つかれば、又新たな解釈も可能かと思うが、現時点でこの「本文」は見つかっていないので、以上の解釈を一つの可能性として挙げておく。

おわりに

以上、中村本の序の構成について考察を加えてきたが、原作にはなかったこの序には、『無名草子』、『和歌色葉』といった作品からの影響が大きいと言える。中でもこれらの作品が座談問答の構成であることからの影響が大きいと考えられ、歴史物語や歌論、歌合、評論など多岐の分野に渡って、この形式が採用されているが、今ここに先行作品の影響を受けつつ新たに物語の改作という分野にも取り入れたのが、この改作本『夜寝覚物語』であったと言える。

座談問答形式は経文の問答体構成から発展してきたものであるが、平安末から中世においてこの形式を採用している作品が舞台設定を寺院にしたり、語り手を僧侶や老尼にしたりしてい

るのは、実際の法談、説教のあり様と無関係ではないだろう。[18] しかし、改作『寝覚』では舞台設定を「をかしき住まひ」とし、物語を語る人物を「大人しき人」とし、寺院や僧侶は出てこない。むしろ「日常の物語の場」[19]が設定され、そこで古老から聞いた話を語る、という物語本来のありようが描かれている。仏教的な色あいがみられた従来の座談問答形式の作品からすれば、より日常的であり、また物語的である。

つまり、改作本『夜寝覚物語』は、座談問答形式が物語の分野に取り入れられた具体的な例としての意義を有する作品と位置づけることができるのではないだろうか。

［注］

（1）金子武雄著『物語文学の研究』（笠間書院・昭和四十九年四月）「夜寝覚物語（異本＝中村本）の研究」の「三　原作本との異同」の「1発端の形式」。

（2）注（1）の金子氏の言を借りて「座談問答」という語を使ったが、森正人氏は「場の物語」（「場の物語・無名草子」『中世文学』27号・昭和五十七年十月）、阿部泰郎氏は「対話様式作品」（「対話様式作品論序説―『聞持記』をめぐりて―」『日本文学』三十七の六・昭和六十三年六月）として一連の作品を規定している。この点における詳しい考察は今は避ける。

なお、座談問答仕立ての作品の主なものを一覧表にしてみたが、作品の成立時期については『日本古典文学大辞典』（岩波書店・昭和五十八年十月以降）を参照した。

座談問答仕立ての作品一覧

作品	成立	場所	語る人物	問く人物	内容
大鏡	応徳三(1086)	雲林院	百歳以上の二老人等	書き手	歴史物語
今鏡	嘉応二(1170)	長谷寺詣りの後、木陰で	二百歳の老女	書き手	歴史物語
治承三十六人歌合	平安末	東山・長楽寺	老人たち	書き手	三十六人の歌人の歌合
宝物集	鎌倉初	嵯峨清涼寺	僧	（康頼入道）書き手	仏道論
水鏡	鎌倉初	長谷寺	修行者	七十三歳の老女	歴史物語
和歌色葉	建久九(1198)	雲林院	九十歳の入道と老人	西山隠士＝書き手	歌学
無名草子	正治二(1200)	東山・桧皮葺の邸	七、八人の女房	八十三歳の老尼	文芸批評
野守鏡	永仁三(1295)	書写山	五十歳位の僧	書き手	歌論
増鏡	南北朝	嵯峨清涼寺	百余歳の老尼	書き手	歴史物語

（3）永井和子著『続寝覚物語の研究』（笠間書院・平成二年九月）「第二章　寝覚物語と改作本寝覚物語」の三において、

序の「人に恋ひらるる人の袖に墨のつくこと」に関して、中村本底本の上欄にある朱筆書入（筆者不明）に『奥義抄』の記事の引用があることを手掛りにして『奥義抄』の記事に近い表現だとしている。

（4）中村本の本文は、『鎌倉時代物語集成　六』（笠間書院・平成五年五月）による。

（5）『奥義抄』と『和歌色葉』の本文は、『日本歌学大系』（風間書房）の第壱巻、第参巻による。

（6）この「本文」に関して、永井氏の注（3）の著の同章で、朱筆書入による次のような「本文」が挙げられているという。

「詩東山云蟰蛸在戸陸機疏云一名長脚荊別河内人謂之喜母此蟲来著衣当有親客至有喜云々」「西京雑記巻三樊将軍会問陸賈曰―賈応之曰―蜘蛛集而百事喜」

また、永井氏は同じ箇所で、中村義雄氏の「王朝の風俗と文学」からの引用も挙げ、そこには「蟰蛸亦名長脚、此虫来着人衣、当有親客至有喜」（毛詩陸疏広要）、「野人昼見蟰子者、以為有喜楽之瑞」（劉勰新論）といった「本文」も見られる。

（7）本文引用は、新潮日本古典集成『無名草子』（新潮社・昭和五十一年十二月）による。

（8）『宝物集』（岩波新日本古典文学大系・平成五年十一月）

ある人は、夢に、命ながくあるべしとみて、久しく世にあらんずれば、（あまりにものさはがし）とおもふほどに、かならずしも実夢にあらざりければ、出家の願ひをとげずしてうせぬ。（巻四）

『古今著聞集』（新潮日本古典集成・昭和五十八年六月）

これによりて泰親・時晴を召して占はせられければ、実夢のよし、おのおの申しけり。（巻一）

（9）永井氏は、注（3）の著の同章の四で、原作、改作ともに巻二にある広沢の場面が関わっているとする。

（10）本文引用は新潮日本古典集成『和漢朗詠集』（新潮社・昭和五十八年九月）による。

（11）「恋」については、永井氏の注（3）の著の同章の四に詳しい考察があるが、三谷栄一氏がその論考の中で「こひ」を「恋」と解釈している（『体系物語文学史　第二巻』〔有精堂・昭和六十二年二月〕所収「物語文学の行方」の「二　物語の結末の変貌と改作」二五六頁）。「寤寐」は『国文学解釈と鑑賞』（至文堂・昭和五十五年九月）所収「座談会・なぜ物語文学を研究するか」の中での解釈。

「寤寐」については、『今昔物語集』に用例が多く、「寝て

も覚めても」という意味で用いられている。（巻十三の十四、巻十五の六、三十二、四十、四十九、巻十七の十四、三十、三十二、三十九など）また、『観智院本類聚名義抄』には「サメテモネテモ」という記載があり、この中村本の序の「こひ」に「寤寐」を当てはめるのはどうかと思う。

(12) 序の傍線部iiiの中の「こしち」については、「越路」「来し路」と解する説、「心地（ここち）」「恋路（こひち）」の誤写説がある。（藤井由紀子「中村本『夜寝覚物語』の〈夢〉の論理」『詞林』三十三・平成十五年四月）

(13) 永井氏の注(3)の著の同章の三で、「実夢」と「虚夢」は対比した語であるという指摘がある。

「虚夢」の用例として次のようなものがある。

『権記』寛弘八年（1011年）十一月十四日

偽説虚夢曰、夢中有僧、形菩薩、其体如観音地蔵等菩薩、

（『増補史料大成』臨川書店）

また、時代が下ると、「実夢」「虚夢」のよみ方が示された例や「虚夢」の説明のある例もあるが、改作本の書かれたと思われる頃のよみ方についての用例は未見。

『いろは字』（妙法寺蔵永禄二年1559年）

「五夢」の中に「実夢（シツム）」「虚夢（キヨム）」

『室町殿日記』（16c終～17c初）

すべて夢は虚夢とこそ申候へかならす気つかれ衰候時分はそこはかとなき事ともを夢うつつともなく我人みるはならひに候（巻第三・京都大学国語国文資料叢書・臨川書店）

(14) 既に三谷栄一氏が、『広漢和辞典』に拠って、「実」が『広韻』の反切から「ジチ」と音読するということを確認され、中村本が「実夢」を「じちん」と書いていることについての説明をされている（注(11)の論考に同じ）。しかし、ここでは、平安時代から鎌倉時代にかけての実際の漢字の和訓を知ることのできる『観智院本類聚名義抄』に拠って考察している。

(15) 金子氏の　注(1)の著の同章の「二　書誌」。

(16) 「こしち」を「虚実」と考えることもできるのではないかということは、中古文学会関西部会第十回例会で発表した際に、山本淳子氏より御教示頂いた。

(17) 例えば次に挙げる例のように、夢で見た事柄の真偽を確かめるといった時に、「虚実」という語を使った内容の話もある。

十七の四十五「吉祥天女摂像奉犯人語」…「其ノ虚実（こじつ）ヲ

問ヒ」

二十の二十二「紀伊国名草郡人、造悪業受牛身語」…「此虚実（こじち）ヲ可知シ」

その他、十四の三十七、十五の六、十六の三。

(18) 永井和子著『寝覚物語の研究』（笠間書院・昭和四十三年七月）第三章第一節「中村本夜寝覚物語の素材」参照。

(19) 注(2)の森氏論文中の語。

〔付記〕

本稿は、平成十七年六月十一日の中古文学会関西部会第十回例会で発表した内容を一部修正したものです。発表時に貴重な御意見や御助言を頂いた方々、また論文化に際しご指導頂いた先生方にこの場をお借りして感謝の意を表したいと思います。

（おだ　まさえ／本学大学院生）